

同志社創立 140 周年記念シンポジウム

「同志社創立 150 周年に向けてー同志社の歴史をどう語り継ぐかー」

同志社百年史の二つの欠点

北 垣 宗 治

『同志社百年史』と『新島襄全集』とはかつての同志社社史資料編集所が渾身の力を揮って世に問うた労作でした。私はその両方に関係させてもらいましたので、あまりその出来栄えを褒める訳にいきません。仮にもし両者が成功であったとすれば、私自身はその成功の原因を二つ挙げることができると思います。一つは何といっても、上野直蔵総長の優れたリーダーシップと後押しです。上野総長は人を見る目がありました。当時文学部事務長をしていた河野仁昭さんを抜擢して社史資料編集所長に据えました。当時の社史資料編集所は同志社本部に所属していました。河野さんは詩人であり、エッセイストであり、筆の立つ人でした。上野総長が見出したもう一人は人文科学研究所におられた杉井六郎教授という歴史家でした。『同志社百年史』を読みますと、杉井先生が同志社史の大枠を示し、今日ご出席の井上勝也先生や宮澤正典先生や私がそれぞれ、与えられたテーマについて執筆したのでありました。

河野さんは編集事務の中心に座っていた人で、集まってくる原稿を点検して、執筆者間に年号や人物や事件についてくいちがいが生じていないかどうかを確かめ、また原稿提出の遅い執筆者を督促し、もしも書けなくなった人があれば、代って書くことまでやってのけました。そのような離れ業のできる、有能な編集者でありました。私は杉井先生と河野さんの功績を高く評価するものですが、特に河野さんの無限の忍耐力と、編集者としての指導力なしには『同志社百年史』とか『新島襄全集』といった大型企画は完成しなかったであろうと思います。或る日、突然息せききって社史資料編集所に飛び込んできた老人がいました。「河野さん、私は同志社百年史から抹殺されま

した！」とその人は叫んだということです。校長まで務めた先生でありましたが、自分の名前がまったく百年史に出てこないことを、校正刷りの段階で知ったからでした。河野さんはそういう個人的な不満をも処理しなくてはなりませんでした。私は河野さんを中心とする事務局体制を「河野マシン」と蔭で呼んでいました。『同志社百年史』も『新島襄全集』も河野マシンの生み出した産物だということができます。

社史資料編集所は『同志社百年史』を完成すると、その余力を用いて『新島襄全集』の編集にとりかかりました。しかし新島全集は本日の主題ではありませんので、これ以上は触れません。ここまでを前置きと致しまして、これから本題に入ります。よく出来た『同志社百年史』でありましたが、私は執筆者の一人として、反省をこめながら、二つの欠点を指摘してみたいのです。この発表を準備しているうちに、三番目の欠点と思いき点に気づくに至りましたが、その三番目、つまり同志社のキリスト教の問題は、余りにも巨大な問題で、簡単に結論を出すことができませんので、やっぱり二つということにして話を進めていきます。

第一の欠点を説明してみましょう。それは新島襄が1890年1月23日に亡くなってから熊本バンド出身の牧師だった小崎弘道が二代目の社長となり、やはり牧師であった横井時雄が三代目の社長になります。ところが四代目の社長は西原清東（さいばら・きよき）という、高知県出身の衆議院議員であり、五代目も同じく高知県出身の衆議院議長だった片岡健吉なのです。西原も片岡もクリスチャンですが、同志社の出身ではありません。六代目は再び熊本バンドの下村孝太郎です。なぜ熊本バンドでもなく、同志社の出身者でもない高知の西原と片岡が同志社の社長に迎えられたのか、という単純な問題に、同志社百年史はまったく答えてくれないのです。西原は至極当たり前のような顔をして百年史に登場しますし、五十年史にしても、事情は同じことです。

次に、第二の欠点を指摘いたします。百年史（通史編）の第一部は「創業と成育」と題されていて、新島の生きていた時代の最初の15年間を扱ったものです。第二部は「キリスト教教育の受難」と題されていますが、まともにその受難という主題を扱っているのは第三章の「キリスト教主義学校同志

社の苦悩」という土肥昭夫先生の担当された章だけで、あとは「ハリス理化学学校」「同志社政法学校」「同志社普通学校」「同志社幼稚園」という風にどんどん同志社が細分化されて取り扱われているのです。確かに同志社は細分化に細分化を重ねて今日に至っており、現在の同志社大学や同志社女子大学の学部や、大学院研究科の名前を正確にあげることさえ困難な状況になっています。しかし私の見るところ、百年史はあまりにも早い段階から同志社を細分化して取り扱ってきた、という印象を免れません。学校が細分化していくことは当然ですが、同志社の全体像が早い内からあいまいになっています。理化学学校、政法学校、という専門の学校はたしかに 1890 年代に発足しましたが、学生数は寥寥たるもので、あのように分化させると、全体としての同志社の姿がどうであったのかが、わかりにくいのです。私は専門学校令にもとづく同志社大学がスタートする 1912 年までは、なるべく同志社を一つの有機体として扱うべきだと考えます。

以上、『同志社百年史』にまつわる二つの欠点を指摘しました。これについては、もちろん背景となる理由があります。自分で自分の種明かしをするようなものですが、私は新島襄のことを調べれば調べる程、アメリカン・ボードという宣教団体が同志社の出発と展開に果たした役割の大きさを思わずにはおられません。新島襄はアメリカン・ボードの十分な支援のもとに同志社英学校を創りました。新島はアメリカン・ボードの意思に忠実でしたが、新島がアメリカン・ボードを指導したという一面もあります。ところが 1890 年に新島が死去しますと、同志社の指導者たちはアメリカン・ボードとの間に距離を置くようになり、遂にはアメリカン・ボードと対立するようになり、関係の断絶までいきます。ボードからくる助成金は途絶え、宣教師も一斉に引き上げて行きます。熊本バンドの一人だった浮田和民のごときは、宣教師不要論どころか、宣教師有害論まで唱えて物議をかもしました。新島なきあと、小崎弘道が同志社の社長を継ぎます。小崎は徴兵令という法律に悩まされました。国民の兵役義務を定めた法律である徴兵令は明治 6 年に制定されており、明治憲法よりも古いものです。日本国が富国強兵策を取って日清戦争へと入っていく段階で、徴兵令という法律でもって私立学校に苦難を強いる時代と直面しなくてはなりませんでした。徴兵令は何度も改正されて

いきましたから、一概に論じることは困難ですが、要するに官立・公立の学校の学生には徴兵免除ないし、徴兵猶予の特典があるのに、私立学校の学生にはその特典がないという、不公平な制度でした。そのため同志社の学生は恐慌をきたし、官公立の学校に転校する者、留学する者、結婚する者、養子縁組する者が続出しました。夏休みを終わってみると、同志社を退学した者、苗字が変わっている者が多くてまごついた、という記録があります。同志社の学生数は目に見えて減っていきました。小崎弘道のあと、第三代社長に選ばれた横井時雄は妥協する道を選びました。つまり同志社通則と呼ばれた同志社の憲法のうち、永久に変更してはならないとされていた条文を変更し、あたかも同志社がキリスト教主義の学校でないかのように読める条文に改めました。

これに対し、いち早く抗議の声を挙げ、同志社がキリスト教の看板をおろしたとして、信頼を裏切ったことを厳しく非難する声明を公表したのが宣教師のデイヴィスでした。同志社の卒業生はこの問題をめぐって、賛成派と反対派の二派に分裂しました。内村鑑三は同志社の「墮落」を、口をきわめて非難攻撃しました。

そこへもってきて、もう一つ深刻な問題が起こりました。アメリカン・ボードは、同志社が信頼を裏切った以上は、いままでの寄附金を返還せよ、そのためには訴訟も辞さない、ということになりました。アメリカン・ボードはかつて横浜でアメリカ総領事を務めた Nicholas W. McIvor という人に全権を委任しました。マッキーヴァーは日本に到着するとすぐ、大隈重信総理に会って、自分の任務を説明しました。彼は駐日アメリカ公使とも密接に協力し、着々と訴訟の準備を進めていきました。大隈総理は同志社の問題にひどく心を痛めていたのです。その背景はこうです。同志社に対するアメリカン・ボードの訴訟が公になりますと、必然的に、日本国がキリスト教学校を圧迫しているという事実が明るみにでます。明治政府は発足以来、徳川幕府が幕末に米英露仏蘭の諸国との間に締結した不平等条約の改定は、歴代政府の最重要課題でした。不平等条約を改訂するために、寺島宗則、井上馨、青木周造、陸奥宗光、小村寿太郎といった外交官や外務大臣の払ってきた努力は、実に涙ぐましいものでした。ようやくその努力が実を結び、不平等条約

は徐々に改訂されていき、もう少しで完全に改定できるところまできていたのです。このように外国との関係に日本政府が神経をとがらせていた時期に、同志社問題が起きました。日本の相手国としては、キリスト教学校を圧迫するような国とは平等につきあえない、従ってこれまでの条約を改定するわけにはいかない、と言いつくことがあれば一大事だったからです。マッキーヴァーが大隈総理に会って、同志社が犯した信託義務違反の説明をしたとき、大隈は身もだえし、この問題をどうかぜひ法廷に持ち出さないでいただきたい、と要望したのでした。(同志社の問題で、身もだえするほど苦しんでくれた総理大臣は大隈重信だけです。)

大隈総理は横井時雄社長を呼んで、アメリカン・ボードと和解することを強くうながしましたが、それはとうてい無理でした。文部省もまた、文部省の立場から同志社問題を真剣に検討したことが記録に残っています。訴訟は開始の一手手前まで迫っていました。マッキーヴァーは作戦として、同志社理事会全体を相手取るのではなく、個々の理事を相手取ることになりました。理事会全体が相手であれば、同志社として公金が使えますが、個々人の場合にはそれが出来ないだろう、との読みからでした。アメリカン・ボードにそれほど頑強に抵抗してきた同志社の理事会でしたが、大隈総理から厳しく要請され、内村鑑三から徹底的に叩かれ、商業新聞からも非難され、校友会が真っ二つに分裂した状況で、同志社はもうこれ以上進めなくなりました。1889年12月28日に同志社の理事会は、総辞職しました。アメリカン・ボードが勝利したのです。しかしそれは、苦い勝利でした。なぜならアメリカン・ボードには、同志社理事全員の辞職後の、いわば戦後処理を敢行し、同志社を再建するという困難な義務が遺されていたからです。

この戦後処理で、最も目覚ましい働きをしたのはデイヴィス宣教師でした。デイヴィスは新島とともに同志社を創った人でしたから、このまま同志社を野垂れ死にさせることはできませんでした。横井社長が変更した同志社憲法の条文は旧に復しました。しかし、横井のあと誰を社長にするのかの問題がありました。それまでのいきさつからすれば、デイヴィスこそが同志社の社長に最もふさわしいと考えた人もいました。しかしデイヴィスは、そうになると、アメリカン・ボードが同志社を占領したかのような印象を世間に与

えかねないから、同志社の社長は日本人であるべきだ、と主張しました。新理事としてデイヴィスが9人を推薦し、校友会が4人を推薦しました。デイヴィスが推薦した理事の中には留岡幸助、堀貞一、山中百、高野重三、西原清東などがいました。校友会推薦理事は小崎弘道、下村孝太郎、浮田和民、岸本能武太でした。小崎弘道は社長に帰ることをねらっていましたが、デイヴィスは、小崎が社長になれば、もとの黙阿弥になるだけだと考え、面とむかってそれに反対しました。結局熊本バンドの一人で、同志社理事会のハリス理化学校の運営の仕方に抗議して同志社を辞めた下村孝太郎が、宣教師たちの支持を得て、短期間、臨時社長を務めました。

このような状況の中で、デイヴィスは衆議院議長で長老派のクリスチャンである片岡健吉を社長として招こうとしたのです。片岡は土佐出身で、新島が尊敬していた板垣退助の系列につながる人でした。片岡はデイヴィスの要請を受けて同志社の社長を引受ける気になりました。すると小崎は、片岡が組合教会員でないことを理由に反対しました。そのため、片岡は自分の同志で、やはり土佐の出身で組合教会員だった西原清東を社長に推したのです。西原は何とか三年間四代目の社長を務めたあと、辞任して渡米しました。その責任を取るかたちで片岡が五代目の社長になったのです。片岡社長は京都にくる時には、学内に寝泊まりして社長の仕事をしましたが、不幸にも一年たつたたないうちに病気で急死しました。そのあと下村孝太郎が六代目の社長になりますが、二年間でやめざるを得なくなりました。日本は日露戦争にさしかかり、政府は軍需産業の面から下村を必要としたのでした。そしてそのあと、原田助が七代目の社長となり、ようやく同志社に和解と安定をもたらしました。私は原田助が登場するまでの苦難の歴史を同志社史は一本化した上で、もっと丁寧に扱うべきだと考えています。つまり1900年から原田社長の登場するまでの7年間は、「アメリカン・ボードの時代」だったのです。

最後に同志社のキリスト教について私の考えていることを一言させていただきます。これは恐る恐る申上げるのですが、『同志社百年史』はどうもキリスト教について、結論を出していないように私は思うのです。1901年から02年にかけて、海老名弾正と植村正久との間に福音主義論争と呼ばれる論争が

繰り広げられました。この論争には決着がつきませんでしたし、恐らく決着はつかないでしょう。私はこの論争を背景としたキリスト教理解が百年史には必要だったと考えます。現在でも日本基督教団では、同志社神学部を卒業した牧師たちと、東京神学大学卒業の牧師たちとの間で、聖餐の意味をめぐる対立が続いています。福音主義とリベラリズムはプロテスタンティズムの横糸と縦糸の関係であると思いますが、その意識を持ちませんと、アメリカのプロテスタント神学の変化につれて、アメリカン・ボード自体が変化していったことは理解できなくなるかもしれません。私は新島襄の神学は、福音主義とリベラリズムの間で、絶妙なバランスの上に立っていたと考えます。

同志社のキリスト教について、もう一つの面を指摘させていただきます。アメリカン・ボードの歴史を読みますと、アメリカン・ボードというアメリカ最初の宣教団体を創った人たちや、十九世紀の宣教師たちは、キリスト教こそが世界第一のすぐれた宗教なのであり、世界中をキリスト教化する、つまり世界の隅々にまで福音が宣べ伝えられることが目標であると確信していました。新島襄もその影響を強く受けました。その結果、新島は仏教の価値をあまり重視しませんでした。十九世紀に日本で働いていた宣教師たちの多くは、十九世紀のうちに日本はキリスト教国になるとさえ考えていました。紙が比較的貴重品であった時代に生きていた新島は、もらった手紙の余白に数字を書き並べています。使ったお金の計算が多いのですが、中にはどうもクリスチャンの数の増え方を推計していたとしか思えないものがあります。私の言いたいことは、同志社を創立した先人たちは、キリスト教を絶対視していた人々だった、ということです。ところが現在のクリスチャンはキリスト教を、彼らのように絶対視することができません。仏教にしてもイスラム教にしても実に底が深く、立派な宗教であることを認めないわけにはいきません。世界の平和のためには、宗教間の対話が必要な時代を私たちは生きているのです。

現在の同志社がキリスト教絶対主義の旗じるしの下で動いているとは思えません。しかし、そうかといって、キリスト教相対主義を自覚的に克服しているとも思えないのです。同志社とキリスト教の関係は曖昧なままです。し

かし新島が信じたように、キリスト教には人間の品性を陶冶する力があることを私もまた信じます。ですから、同志社史は 150 年史であろうと、200 年史であろうと、キリスト教をどのように捉えるのか、そのことをはっきりさせる必要がある、と私は確信いたします。これはきわめて難しい問題ですが、それに答を出す努力を現在の世代も、将来の世代も、怠ってはならないと考えます。

ご清聴感謝いたします。